

樂記の形成に至る理念の総合的考察

栗原圭介

A consideration study on the ideas leading to the formation of Gar ker

Keisuke KURIHARA

禮記卷第十九に、樂記第十九がある。樂記は、凡て五十の種別より成る。此の禮記において周禮・儀禮の三禮において、初めて注を施した經學者は後漢の鄭玄である。そこで本研究では、本研究に在っては鄭玄の注は原文研究に於ても亦啓發するところが些くない。音の起原は、人心に由りて生ずる。人心の動くは、之をして然ら使むるなりとある。物に感じて動く。故に聲に形る。鄭注は、宮商角徵羽雜比を音と曰う。單出を聲と曰う。形は猶ほ見のごときなり。原文は、聲相應、故生變の鄭注に、樂之器、彈其宮則象宮應。然不足樂。是以變之使雜也。易曰、同聲相應、同氣相求。春秋傳曰、若以水濟水。誰能食之。若琴瑟之專一。誰能聽之。

ここに言う、易曰とか春秋傳曰とか言う古樂の論は、左氏會箋、第二十四、昭二十に詳悉してあるので、其の項目に該當する概念語とも見做し得る部分を摘記して、樂音の何たるかを知る手懸りりと成ること念じている。以下に昭二十にある樂音の論を記載する。

故詩曰、亦有和羹。既戒且平。饗嘏無言。時靡有爭。先王之濟五味。和五聲成。以平其心。成其政也。聲亦如味。一氣、二體、三類、四物、五聲、六律、七音、八風、九歌、以相成也。清濁小大短長疾徐哀樂剛柔遲速高下出入周疏以相濟也。君子聽之、以平其心。心平德和。故詩曰、德音不瑕。云云。とある。そこで樂記の序節として、變じて方を成す。之を音と謂ふ。音を比して、之を樂し、干戚羽旄、之を樂と謂ふ。

一 禮樂刑政の形成

樂は音の由りて生ずる所なり。其の本は人心の物に感ずるに在るなり。是の故に其の哀心感ずる者は、其の聲嗥にして以て殺、其の樂心感ずる者は、其の聲嘽にして以て緩。其の喜心感ずる者は、其の聲發して以て散。其の怒心感ずる者は、其の聲粗にして以て厲。其の敬心感ずる者は、其の聲直にして以て廉。其の愛心感ずる者は、其の聲和にして以て柔。六者は性に非ざるなり。物に感じて而して後に動くなり。是の故に先王之を感ずる所以の者を慎む。故に禮以て其の志を道き、樂以て其の聲を和し、政て其の行を一にし、刑以て其の姦を防ぐ。禮樂刑政は其の極一なり。民心を同じくして治

道を成す所以なり。

二 五音の機能と形而上學的展開

音それ自體は、人心に因りて生ずるが故に、情は中に動き、聲に形る。聲は文を成す。之を音と謂ふ。是の故に治世の音は、安らかにして以て楽しむ。其の政は自ら和と成る。亂世の音は、怨みて以て怒る。其の政は乖く。凶國の音は、哀しく以て思ふ。其の民は困しむ。その故に聲立の道は、政と通ず。そこで、八音を成す、金（鐘）・石（磬）・絲（絃）・竹（管）・匏（笙）・土（壎）・革（鼓）・木（柷敔）の八音、果して政に於て和するか否か。玉藻第十三に言ふところの、御瞽幾聲之上下。注、瞽は樂人。幾は猶は察のごときなり。其の哀樂を察することが、果して可能か否かの岐路となる。

音に五音がある。宮を君と爲し、商を臣と爲し、角を民と爲し、徵を聿と爲し、羽を物と爲す。此の五者が亂れざれば、則ち怙遷の音無し。凡そ聲濁る者は尊く、清む者は卑し。怙遷敝敗は和せざるの貌。宮亂るれば荒み、其の君驕る。商亂るれば則ち跛き、其の臣壞る。角亂るれば則ち其の民怨む。徵亂るれば則ち哀み、其の事勤む。羽亂るれば則ち危く、其の財匱し。五者皆亂れ、迭ひに相陵ぐ。之を慢と謂ふ。此の如きは則ち國の滅亡日無し。君臣民事物の道を亂すと則ち其の音應へて亂る。注に、書曰く、王耄荒ぶ。と易曰く、平の跛せざる無くを引用している。

鄭律の音は、亂世の音なり。慢に比す。桑間濮上の音は、込國の音なり。其の政散じ、其の民流し、上を誣ひ私を行ひて、止む可からざるなり。鄭注に、濮水の上は、地に桑間なる者有り、込國の音、此の水に於て出づるなり。昔殷の紂、師延を使して靡靡之樂を作ら使む。已にして自ら濮水に沈む。後師滑過ぐ焉。夜聞きて之を寫す。晉平公と爲し之を鼓す。是を之れ謂ふなり。桑間は濮陽の南に在り。誣は罔なり。

三 樂音の科學的進化

先づ初めに留意すべきは、樂の特質として、樂は倫理に通ずる者なり。鄭注は、倫は類のごときなり。理は分なりと。是の故に、聲を知りて音を知らざる者は禽獸と是れなりと。音を知りて樂を知らざる者は、衆庶是れなりと。唯だ君子のみは能く樂を知ると爲す。鄭注に、禽獸は此の聲を爲すを知る耳。其の宮商の變を知らざるなり。八音並作して克く諧するを樂と曰ふ。と注してある。是の故に、聲を審らかにして以て音を知り、音を審らかにして以て樂を知り、樂を審らかにして政を知り、而して治道備はる。是の故に聲を知らざる者は、與に音を言ふ可からず。音を知らざる者は、與に樂を言ふ可からず。樂を知れば則ち禮に幾し。禮樂皆得、之を有徳と謂ふ。徳は得なり。鄭注に、幾は近なり。樂を聽きて政の得失を知らば、則ち能く君臣民事物の禮を正すなり。とある。是の故に、樂の隆は、音を極むるに非ざらなり。食饗の禮は、味を致すに非ざるなり。鄭注に、隆は猶ほ盛のごときなり。極は窮なり。清廟の瑟は、朱絃にして疏越、壹倡して三嘆し、遺音有る者なり矣。大饗の禮は、玄酒を尙にして、而して腥魚を俎にし、大羹和せず。遺音有る者なり矣。大饗の禮は、玄酒を尙にし

て、而して腥魚を俎にし、大羹和せず、遺音有る者なり矣。鄭注に、清廟は樂を作り清廟を歌ふを謂ふなり。朱絃練朱絃、鍊なれば則ち聲濁る。越瑟底孔なり。之を晝疏し、聲をして遅からせ使むるなり。倡（歌を歌って人に聞かせるウタイメ。）三歎三人従って之を歎ずるのみ。大饗は先王を袝祭し、腥魚を以て俎實と爲し、之を臠熟せず、大羹肉滫、調ふるに鹽菜を以てせず。遺は猶ほ餘のごときなり。とある。是の故に、先王の禮樂を制するや、以て口腹耳目の欲を極めんとするに非ざるなり。將に以て民に好惡を平らにして人道の正に反るを教へんと將るなり。鄭注に、之を教へ好惡を知ら使むるなり。と警告しているのは、民が眞に好惡の何たるかを眞に自覺して、人道の正に違ふことが絶無であるに因る。人生れて靜なるは、天の性なり。物に感じて動くは、性の欲なり。物至りて知知る。然して後に好惡形はる焉。好惡内に節無く、知外に誘ふとき、躬に反すること能は不れば、天理滅せん矣。夫れ物の人を感ずること窮り無し。而して人の好惡節無ければ、則ち是れ物至りて而人物に化するなり。人物に化するなりとは、天理を滅して而して人欲を窮むる者なり。鄭注に、人欲を窮むとは、爲さざる所無きを言ふと。是に於て悖逆詐僞の心有り、淫佚作亂の事有り。是の故に強者は、弱を脅し、象は寡を暴し、知者は愚を詐り、勇者は怯を苦しめ、疾病養はず、老幼孤獨、其の所を得ず。此れ大亂の道なり。

是の故に、先王の禮樂を制するは、人之が節を爲す。（鄭注は、この言爲は法度を作り、以て其の欲を遏む。）衰麻哭泣は、喪紀を節するなり。鐘鼓干戚は、安樂を和する所以なり。昏姻冠笄は、男女を別つ所以なり。射鄉食饗は、交接を正す所以なり。（鄭注に、男二十而冠するは、女許嫁して而して笄するは、成人の禮、射鄉大射・鄉飲酒は是なり。）禮は民心を節し、樂は民してを和し、政以て之を行ひ、刑以て之を防ぐ。禮樂刑政、四達して而して悖らざれば、王道備はる矣。

樂は同を爲し、禮は異を爲す。同なれば則ち相親しみ、異なれば則ち相敬す。（鄭注に、同は好惡に協ふを謂ふなり。異は貴賤に別つを謂ふ。）樂勝てば則ち流し、禮勝てば則ち離す。（鄭注に、流とは合行して敬せざるを謂ふなり。離とは析居して和せざるを謂ふなり。）情を合し貌を飾る者は、禮樂の事なり。（鄭注に、其の並行して斌斌然たるを欲するなり。）禮義立てば、則ち貴賤等あり矣。樂文同じければ、則ち上下和す矣。好惡著るれば、則ち賢不肖別る矣。刑暴を禁じ、爵賢を擧ぐれば、則ち政均し矣。仁以て之を愛し、義以て之を正す。此くの如くなれば、則ち民治行はる矣。（鄭注に、等は階級なり。）樂は中由り出で、（鄭注に、和は心に在るなり。禮は外自り作る。鄭注に、敬は貌に在るなり。）樂は中由り出づ。故に靜なり。禮は外自り作る。故に文あり。（鄭注に、文は猶ほ動のごときなり。）大樂は必ず易なり。大禮は必ず簡なり。（鄭注に、易簡は清廟大饗に於けるが若く然り。）樂至れば則ち怨み無く、禮至れば則ち争はず。揖讓して而して天下を治むる者は、禮樂の謂ひなり。（鄭注に、至は猶ほ達のごときなり。）暴民作らず、諸侯賓服し、兵革試みず。五刑用ゐず。百姓患無く、天子怒らず。此くの如くなれば、則ち樂達す矣。父子の親を合せ、長幼の序を明にし、以て四海の内を敬す。天子此くの如くなれば則ち禮行はる矣。（鄭注に、賓は協なり。試は用なり。）

四 大樂と大禮との實存が天地に對應する論據

大樂は天地と和を同じくし、大禮は天地と節を同じくす。(鄭注に、言ふところは、天地の氣と其の數とに従ふ。)とある。和するが故に百物失はず。(鄭注に、其の性を失はず。)節あるが故に天を祀り地を祭る。(鄭注に、物を成すに功有れば報ずる焉。)明には則ち禮樂有り。(鄭注に、人に教ふる者なり。)幽には則ち鬼神有り。(鄭注に、天地を助け物を成す者なり。易の繫辭上に、仰以觀於天文、俯以察於地の下に、是の故に鬼神の情狀。天地と相似たり。五帝の德に相似たり。五帝の德説きて曰く、死して民其の神を畏る者百年。春秋傳に曰く、若敖氏之鬼。然らば則ち聖人の精氣、之を神と謂ふ。賢知の精氣を鬼と謂ふ。)此くの如くなれば則ち四海の内、敬を合し愛を同じくす。禮は事を殊にして敬を合する者なり。樂は文を異にして愛を合する者なり。禮樂の情同じ。故に明王以て相沿るなり。(鄭注に、沿は猶ほ因なり述なりのごときなり。孔子曰く、殷は夏の禮に因り、損益する所知る可きなり。周は殷の禮に因り、損益する所知る可きなり。沿は或は縁に作る。)故に事は時と並び、(鄭注に、事を擧ぐるは其の時に在るなり。禮器に曰く、堯は舜に授け、舜は禹に授く。湯は桀を放つ。武王は紂を伐つは時なり。)名は功と偕にす。(鄭注に、名は其の功に在りと爲すなり。偕は猶ほ俱のごときなり。堯は大章を作り、舜は大韶を作り、禹は大夏を作り、湯は濩を作り、武王は大武を作る。各其の天下を得るの功に因る。)故に鐘鼓管磬、羽籥干戚は、樂の器なり。屈伸俯仰上下、周還裊襲は禮の文なり。(鄭注に、綴とは鄭を謂ふ。舞者の位なり。兆は其の外慣營域なり。)故に禮樂の情を知る者は能く作し、禮樂の文を識る者は、能く述ぶ。(鄭注に、述とは其の義の訓を謂ふ。)作者之を聖と謂ふ。述者之を明と謂ふ。明聖とは述作の謂なり。樂は天地の和なり。禮は天地の序なり。和するが故に百物皆化し、序あるが故に羣物皆別る。(鄭注に、化は猶ほ生のごときなり。別は形體異なるなり。)樂は天由り作り、禮は地を以て制す。(鄭注に、天地に法るを言ふなり。)過制すれば則ち亂れ、過り作せば則ち暴なり。(鄭注に、過は猶ほ誤りのごときなり。暴は文武の意を失ふ。天地に明にして、然して後に能く禮樂を興すなり。論倫患らう無きは、樂の情なり。欣喜歡愛は、樂の官なり。(鄭注に、倫は猶ほ類のごときなり。患は害なり。官は猶ほ事のごときなり。)中正邪無きは、禮の質なり。莊敬恭順は、禮の制なり。(鄭注に、質は猶ほ本のごときなり。)若し夫れ禮樂の金石に施し、聲音に越し、宗廟社稷に用ゐ、山川鬼神に事ふるは、則ち此れ民と同じくする所なり。(鄭注に、言ふところは情官質制は、先王の専らにする所なり。)王者功成りて樂を作し、治定りて禮を制す。(鄭注に、功成り治定まるは同時耳。功は王業を主とし、治は民に教ふるを主とす。明堂位に周公に説きて曰く、天下を治めて六年、諸侯を明堂に朝し、禮を制し樂を作す。)其の功大なる者は、其の樂備り、其の治辯き者は、其の禮具はる。(鄭注に、辯は徧也。)干戚の舞は、備樂に非ざるなり。(鄭注に、樂は文德を以て備と爲す。咸池の若き者は、孔子曰く、韶美を盡す矣。又善を盡すなり。武を謂ふ。美を盡せり矣。未だ善を盡さざるなり。)孰亨して而して祀るは、達禮に非ざるなり。(鄭注に、達は猶ほ具のごときなり。郊特性に曰く、郊血、大饗腥、三獻燭、一獻孰は至敬にして味を饗せずして、而して氣臭を貴ぶなり。)五帝時を殊にし、樂に相沿はず。三王世を異にし、禮を相襲はず。(鄭注に、其の損益有るを言ふなり。)樂極れば則ち

憂あり。禮粗なれば則ち偏す矣。(鄭注に、樂人の好む所なり。害は淫侂に在り。禮は人の勤むる所なり。害は倦略に在り。) 夫の樂に敦くして而して憂無く、禮備はりて而して偏ならざる者に及では、其れ唯大聖乎。(鄭注に、敦は厚なり。) 天高く地下く、萬物散殊にして、而して禮制行はる矣。(鄭注に、禮は異と爲すなり。) 流れて息まず、合同して化す。而して樂興る焉。(鄭注に、樂を同と爲すなり。) 春作し夏長ずるは仁なり。秋斂し冬藏するは義なり。仁は樂に近く、義は禮に近し。(鄭注に、言ふところは樂は陽に法りて而して生ず。禮は陰に法りて而して成る。) 樂は和を敦くし、神に率ひて而して天に従ふ。禮は宜を別にし、鬼に居ひて而して地に従ふ。(鄭注に、敦和樂は同を貴ぶなり。率は循なり。從は順なり。宜を別つは禮は異を尚ぶなり。鬼に居りて其の爲す所に居るも亦た之に循ふを言ふなり。鬼神は先聖先賢を謂ふなり。) 故に聖人樂を作して以て天に應じ、禮を制して以て地に配す。禮樂明かに備りて、天地官す矣。(鄭注に、官は猶ほ事のごときなり。各く其の事を得。)

天尊く地卑く、君臣定る矣。卑高已に陳して、貴賤位す矣。動靜常有りて、小大殊なり矣。方は類を以て聚まり、物は羣を以て分れて、則ち性命同じからず矣。天に在りては象を成し、地に在りては形を成す。此くの如くなれば則ち禮は天地の別なり。(鄭注に、卑高は山澤を謂ふなり。位矣尊卑の位は山澤を象るなり。動靜陰陽は事を用ふ。大小は萬物なり。大なる者は常に存し、小なる者は陽に隨つて出入す。方は行蟲を謂ふなり。物は殖生者を謂ふなり。性の言は生なり。命は生の長短なり。象は光耀なり。形は禮の貌なり。) 地氣上齊し、天氣下降し、陰陽相摩し、天地相蕩す。之を鼓するに雷霆を以てし、之を奮はすに風雨を以てし、之を動かすに四時を以てし、之を煖むるに日月を以てして而して百化興る焉。此くの如くなれば、則ち樂は天地の和なり。(鄭注に、齊讀んで躋と爲す。躋は升なり。摩は猶ほ迫のごときなり。蕩は猶ほ動のごときなり。奮は迅なり。百化百物は化生する者なり。) 化は時ならざれば則ち生ぜず。男女は辨無ければ則ち亂升なる。天地の情なり。(鄭注に、辨は別なり。升は成なり。樂失なれば則ち物を害す。禮失なれば則ち人を亂る。) 夫の禮樂の天に極りて而して地に蟠り、陰陽に行れて而して鬼神に通ずるに及びて、高きを窮め遠きを極めて、而して深厚を測る。(鄭注に、極は至なり。蟠は猶ほ委のごときなり。高遠は三辰なり。深厚は山川なり。言ふところは禮樂の道は、上天に至り地下に委ね、則ち其の間之かざる所無し。) 樂は大始に著り、而して禮は成物に居る。(鄭注に、著の言たる處なり。大始は百物の始生なり。) 著らかにして息まざる者は天なり。著にして動かざる者は地なり。(鄭注に、著は猶ほ明白のごときなり。息は猶ほ休止のごときなり。易に曰く、天行健なり。君子以らく自強息まずと。) 一動一靜は、天地の閒なり。(鄭注に、閒とは百物を謂ふなり。) 故に聖人曰く、禮樂を云ふと。(鄭注に、禮樂の天地に法ると言ふなり。樂は靜にして禮は動く。其の並しく事を用ふるは、則ち亦天地の閒耳。) 昔者舜、五絃の琴を作爲す、以て南風を歌ひ、夔始めて樂を制して、以て諸侯に賞す。(鄭注に、夔が舜天下之君と此の樂を共にせんと欲するなり。南風は長養の風なり。以て父母の己を長養するを言ふ。其の辭未だ聞かざるなり。夔舜の時、樂を典る者なり。書に曰く、夔女に命じ樂を典れと。) 故に天子の樂を爲るや、以て諸侯の徳有る者に賞するなり。徳盛にして教尊く、五穀時に熟し、然して後に之に賞するに樂を以てす。故に其の民を治めて

勞せしむる者は、其の舞の行綴遠く、其の民を治めて逸せしむる者は、其の舞の行綴短し。(鄭注に、民勞するときは則ち徳薄し。鄧相は去聲。舞人少なきなり。民逸するときは則ち徳盛んにして、鄧まるもの相去ること近くして、舞人多きなり。) 故に其の舞を觀て其の徳を知り、其の諡を聞きて其の行を知るなり。(鄭注に、諡とは行の迹なり。) 大章は之を章らかにするなり。(鄭注に、堯は樂名なり。言ふところは堯の徳は章明なり。周禮に之を闕く。或は大卷に作る。) 咸池は備はるなり矣。(鄭注に、黄帝作る所の樂名なり。堯は増修して之を用ふ。咸は皆なり。池之言施なり。徳の施さざる無きを言ふなり。周禮に大咸と曰ふ。) 韶は繼ぐなり。(鄭注に、舜は樂名なり。韶之言紹なり。言ふところは舜能く堯の徳を繼紹す。周禮に大韶と曰ふ。) 夏は大なり。(鄭注に、禹は樂名なり。言ふところは禹は能く堯舜の徳を大にす。周禮に大夏と曰ふ。) 韶は繼ぐなり。(鄭注に、舜は樂名なり。韶之言紹なり。言ふところは舜能く堯の徳を繼紹す。周禮に大韶と曰ふ。) 夏は大なり。(鄭注に、禹は樂名なり。言ふところは禹能く堯舜の徳を大にす。周禮に大夏と曰ふ。) 殷周の樂は盡くせり矣。(鄭注に、言ふところは人事を盡くすなり。周禮に大濩、大武と曰ふ。) 天地の道、寒暑時ならざれば則ち疾あり、風雨節あらざれば則ち饑う。教は民の寒暑なり。教時ならざれば則ち世を傷ぶる。事は民の風雨なり。事節あらざれば則ち功無し。(鄭注に、教は樂を謂ふなり。) 然らば則ち先王の樂を爲るや、法を以て治めんとするなり。善なれば則ち行徳に象矣。(鄭注に、法を以て治め、樂を以て治の法と爲す。行は徳に象る。民の行は、君の徳に順ふなり。) 夫れ豕を豢ひ酒を爲るは、以て禍を爲すに非ざるなり。而して獄訟益繁きは、則ち酒の流して禍を生ずるなり。(鄭注に、穀を以て犬豕を食ふを豢と曰ふ。爲は作なり。言ふところは豕を豢酒を作るは、本饗祀を以て賢を養ひ、而して小人之を飲む。善く酗して以て獄訟を致す。)

是の故に先王因りて酒禮を爲る。壹獻の禮に、賓主百拜す。終日酒を飲みて、而して醉ふことを得ず焉。此れ先王の酒の禍に備ふる所以なり。(鄭注に、壹獻は士の酒を飲むの禮なり。百拜以て多きに喩ふ。) 故に酒食は歡を合する所以なり。樂は徳に象る所以なり。禮は淫を綴むる所以なり。(鄭注に、綴は猷ほ止むるがごときなり。) 是の故に先王大事有れば、必ず禮有り以て之を哀み、大福有れば、必ず禮有り以て之を樂む。哀樂の分、皆禮を以て終る。(鄭注、大事は死喪を謂ふなり。) 樂なる者は、聖人の樂む所なり。而して以て民心を善くす可し。其の人を感ぜしむること深く、其れ風を移し俗を易ふ。故に先王其の教を著す焉。(鄭注に、著は猶ほ立のごときなり。司樂以下を立て、國子を教へ使むるを謂ふ。)

夫れ民に血氣心知の性有りて、而して哀樂喜怒の常有ること無し。感に應じ物に起りて而して動き、然して後に心術形焉。(鄭注に、言ふところは之に感ずる所以に在るなり。術の由る所なり。形は猶ほ見のごときなり。) 是の故に志微嘯殺の音作り、而して民思憂し、嘽諧慢易、繁文簡節の音作りて而して民康樂し、粗厲猛起、奮末廣賁之音作りて、而して民剛毅なり。廉直勁正莊誠之音作りて、而して民肅敬なり。寬裕肉好、順成和動之音作りて、而して民慈愛し流辟邪散、狄成滌濫之音作りて、而して民淫亂なり。(鄭注に、志微意細なり。吳の公子札、鄭風を聽きて而して曰く、其の細已に甚

し。民堪之弗ざるなり。簡節少易なり。奮末にして四支を動使するなり。責讀んで憤と爲す。憤怒して氣充實するなり。春秋傳に曰く、血氣狡憤し、肉肥ゆるなり。秋滌往來は疾の貌なり。濫は僭差なり。此れ皆民心に常無きの傲なり。肉或は潤と爲す。) 是の故に先王之を情性に本づけ、之を度数に稽へ、之を禮義に制し、生氣の和に合せしめ、五常の行に道らしめ、之をして陽にして散ぜず、陰にして而して密ならず、剛氣怒らず、柔氣懾れず、四暢中に交りて、而して外に發作し、皆其の位に安んじて而して相奪はざるなり。(鄭注に、生氣は陰陽の氣なり。五常は五行なり。密の言閉なり。懾は猶ほ恐懼のごときなり。) 然して後に之が學等を立て、其の節奏を廣くし、其の文采を省らかにし、以て徳行を繩る。(鄭注に、等は差なり。各々其の才の差を用ひて之を學ぶ。廣は之を増習するを謂ふ。省は猶ほ審のごときなり。文采は節の奏合を謂ふなり。繩猶ほ度のごときなり。周禮大司樂に樂語を以て國子に、興・道・諷・誦・言・語を教へ、樂舞を以し、國子に、雲門・大卷・大咸・大韶・大夏・大濩・大武を教ゆ。) 小大之稱を律し、終始の序を比し、以て事行に象る。(鄭注に、律は六律なり。周禮の典同に、六律六同を以て、天地四方陰陽の聲を辨じ、以て樂器を爲む。小大は高聲・正聲の類を謂ふなり。終始は宮に始まり、羽に終るを謂ふなり。宗廟には黃鐘を宮と爲し、大呂を角と爲す。大族を徵と爲し、應鐘を羽と爲し、以て事行に象る。宮を君と爲し、商を臣と爲す。) 親疏貴賤、長幼男女の理をして、皆樂に形見せ使む。故に曰く、樂は其の深きを觀ると。(鄭注に、同じく之を聽き、和敬せざるは莫く、和順せざるは莫く、和親せざるは莫きを謂ふ。)

土敝すれば則ち艸木長ぜず。水煩なれば則ち魚鼈も大ならず、氣衰ふれば則ち生物も遂げず。世亂るれば、則ち禮慝にして而して樂淫なり。是の故に其の聲哀んで而して莊ならず。樂んで而して安らかならず。慢易にして以て節を犯し、流湏して以て本を忘る。廣なれば則ち姦を容れ、狹なれば則ち欲を思ふ。條暢之氣を感かして、而して平和の徳を減す。是を以て君子之を賤しむなり。(鄭注に、遂は猶ほ成のごときなり。慝は穢なり。廣は聲の緩なるを謂ふなり。狹は聲の急なるを謂ふなり。感は動なり。人條暢の善氣を動かし、其の所を失は使む。)

凡そ姦聲の人を感じれば、而して逆氣之に應じ、逆氣象を成して、而して淫樂興る焉。正聲人を感じれば、而して順氣之に應じ、順氣象を成して、而して和樂興る焉。倡和應有り、回邪曲直、各々其の分に歸して、而して萬物之理、各々類を以て相動くなり。(鄭注に、象を成す者は、人の樂習を謂ふ焉。) 是の故に君子情に反りて以て其の志を和し、類に比して以て其の行を成す。姦聲亂色聰明に留めず、淫樂慝禮、心術に接せず、惰慢邪辟之氣、身體に設けず、耳目鼻口、心知百體をして皆順正に由ら使め、以て其の義を行ふ。(鄭注に、反は猶ほ本のごときなり。術は猶ほ道のごときなり。)

然して後に發するに聲音を以てし、而して文るに琴瑟を以てし、動かすに干戚を以てし、飾るに羽旄を以てし、從ふに簫管を以てし、至徳の光を奮ひ、四氣の和を動かし、以て萬物の理を著す。(鄭注に、奮は猶ほ動のごときなり。至徳の光を動かすとは、天神を降し、地祇を出だし、祖考を假るを謂ふ。著は猶ほ成のごときなり。) 是の故に清明は天に象り、廣大は地に象り、終始は四時に象り、周還は風雨に象り、五色文を成して而して亂れず、八風律に従ひて而して姦ならず、百度數を得て而

して常有り、小大相成り、終始相生じ、倡和清濁、迭ひに經を相爲す。(鄭注に、清明とは人聲を謂ふなり。廣大は鐘鼓を謂ふなり。周還は舞者を謂ふ。五色は五行を謂ふなり。八風は律に従ひ、節に應じ至るなり。百度は百刻なり。日月は晝夜正を失はざるを言ふなり。清とは蕤賓の應鐘に至るを謂ふなり。濁は黃鐘の中呂に至るを謂ふ。) 故に樂行はれて而して倫清く、耳目聰明、血氣和平、風を移し俗を易へて、天下皆寧し。(鄭注に、言ふところは樂の用は則ち人理を正し、陰陽を和するなり。倫は人道を謂ふなり。) 故に曰く、樂は樂なり。君子は其の道を得るを樂み、小人は其の欲を得るを樂む。道を以て欲を制すれば、則ち樂みて亂れず、欲を以て道を忘るれば、則ち惑ひて而して樂しまず。(鄭注に、道は仁義を謂ふなり。欲は邪淫を謂ふなり。)

是の故に君子は情に反りて以て其の志を和し、樂を廣めて以て其の教を成す。樂行はれて而して民は方に郷ふ。以て德を觀る可し矣。(鄭注に、方は猶ほ道のごときなり。) 德は性の端なり。樂は德の華なり。金石絲竹は、樂の器なり。詩は其の志を言ふなり。歌は其の聲を咏くするなり。舞は其の容を動かすなり。三者は心に本づき、然して後に樂器之に従ふ。是の故に情深くして而して文明らかに氣盛んにして而して化神なり。和順中に積みて、而して英華外に發す。唯々樂は以て偽を爲す可からず。(鄭注に、三者は本は、志なり。聲なり。容なり。言ふところは内に此の本無ければ、則ち樂を爲す能はざるなり。)

樂は心の動きなり。聲は樂の象なり。文采節奏は、聲の飾りなり。君子其の本を動かし、其の象を樂しみ、然して後に其の飾を治む。是の故に先づ鼓して以て警戒し、三步以て方を見し、再始以て往を著はし、復亂以て歸を飾る。奮疾して而して拔せず、幽を極めて而して拔せず、幽を極めて而して隱さず、獨り其の志を樂みて、其の道を厭はずし備さに其の道を擧げて、其の欲を私せず、其の故に情見はれて而して義立ち、樂終りて而して德尊し。君子以て善を好みし、小人以て過ちを聽く。故に曰く、生民之道、樂を大と爲すと焉。(鄭注に、文采は樂の威儀なり。先鼓とは將に樂を奏せんとするに、先づ鼓を繋ち、以て象を警戒するなり。三步は將に舞はんとするに必ず先づ三たび足を擧げ以て且に舞はんとするの漸を見るを謂ふなり。再始以て往かんとするを著はす。武王喪を除き、孟津之上に至り、紂は未だ伐つ可からず。還歸して二年、乃ち遂に之を伐つ。武舞再更始、以て伐つの時再び往くを明らかにするなり。復び亂れ以て歸るを飾るは、鐃を鳴らして而して退くを謂ふ。以て整え歸るを明らかにするなり。奮疾は舞ふ者を謂ふなり。幽を極むとは歌ふ者を謂ふなり。)

樂也者は施なり。禮也者は報なり。(鄭注に樂出でて而して反らず、而して禮に往來有るなり。) 樂は其の自りて生ずる所を樂しみ、而して禮は其の自りて始まる所に反る。樂は德を章かにし、禮は情に報じ始めに反るなり。(鄭注に、自は由なり。)

所謂大輅なる者は、天子の車なり。龍旅九旒は天子の旌なり。青黒の緣は、天子の寶龜なり。之に従ふに牛羊の羣を以てするは、則ち諸侯に贈る所以なり。(鄭注に、諸侯に贈るとは、來朝し將に去らんと將るに、之に送るに禮を以てするを謂ふ。)

樂なる者は情の變ず可からざる者なり。禮なる者は理の易ふ可からざる者なり。(鄭玄注に、理は

猶ほ事のごときなり。) 樂は同を統べ、禮は異を辨ず。(鄭玄注に、同を統ぶとは、和合を同じくするなり。異を辨ずとは、尊卑を異にするなり。) 禮樂の説は、人情を管ぬ矣。(鄭玄注に、管は猶ほ包のごときなり。)

本を窮め變を知るは、樂の情なり。誠を著らかにし、偽を去るは、禮の經なり。禮樂は天地の情に徇り、神明の德に達し、上下の神を降し興して、而して精粗の體を凝し是し、君臣父子の節を領す。(鄭注に、徇は猶ほ依象のごときなり。降は下なり。興猶ほ出のごときなり。凝は成なり。精粗は萬物の大小を謂ふなり。領は猶ほ理治のごときなり。)

是の故に大人禮樂を擧ぐれば、則ち天地は將に爲めに昭かならんと將焉。(鄭注に、天地將に之が爲に昭然明ならんとするを言ふなり。) 天地訢合し、陰陽相得て、萬物を煦嫗覆育す。然して後に艸木茂り、區萌達し、羽翼奮ひ、角觝生じ、蟄蟲昭蘇し、羽ある者は嫗伏し、毛ある者は孕鬻し、胎生の者は殯れ、而して卵生の者は殯けず、則ち樂の道に歸する焉耳(鄭注に、訢讀んで熹と爲す。熹は猶ほ蒸のごときなり。氣を煦と曰ひ、體を嫗と曰ひ、屈生を區と曰ひ、觝無きを觝と曰ふ。昭は猶ほ曉のごときなり。蟄蟲は發出を以て曉と爲す。更息を蘇と曰ふ。孕は任なり。鬻は生なり。内敗を殯と曰ふ。殯は猶ほ裂のごときなり。今齊人の語に殯者有り。)

樂は黃鐘大呂、弦歌干揚を謂ふに非ざるなり。樂の末節なり。故に童者は之を舞ふ。筵席を鋪き、尊俎を陳ね、籩豆を列ね、以て升降して禮を爲す者は、禮の末節なり。故に有司之を掌る。(鄭注に、禮樂の本は、人君に由るなり。禮の本は、誠を著し偽を去る。樂の本は本を窮め變を知る。)

樂師は聲詩を辨ず。故に北面して而して弦す。宗祝は宗廟の禮を辨ず。故に尸に後る。商祝は喪禮を辨ず。故に主人に後る。(鄭注に、辨は猶ほ別なり。正なりのごとく。弦は琴瑟を鼓するを謂ふなり。尸に後れて後に居るは禮儀を贊く。此れ本を知る者は尊く、末を知る者は卑きを言ふ。) 是の故に德成りて而して上たり。藝成りて而して下たり。行成りて而して先たり。事成りて而して後たり。(鄭注に、德は三德なり。行は三行なり。藝才は技なり。先は位の上に在るを謂ふなり。後は位の下に在るを謂ふなり。)

是の故に先王上に有り下に有り。先に有り後に有り。然して後に以て天下に制有る可きなり。(鄭注に、尊卑備はり、乃ち制作以て治法と爲す可きを言ふ。)

魏の文侯子夏に問ひて曰く、吾端冕して而して古樂を聽けば、則ち唯々臥せんことを恐る。鄭衛の音を聽けば、則ち倦むことを知らず。敢て問ふ。古樂の彼の如くなるは何ぞや。新樂の此の如くなるは何ぞやと。(鄭注に、魏の文侯晉の大夫畢萬の後、諸侯に僭する者なり。端玄衣なり。古樂は先王の正樂なり。) 子夏對へて曰く、今夫れ古樂は、進むに旅し退くに旅す。和正にして以て廣く、弦匏笙簧、會守拊鼓あり。始奏文を以てし、復亂武を以てし、治亂相を以てし、訊疾雅を以てす。君子是に於て語り、是に於て古を道ひ、身を脩めて家に及び、天下を平均す。此れ古樂の發なり。(鄭注に、旅は猶ほ俱のごときなり。俱に進み俱に退くは、其の齊一なるを言ふなり。和正以て廣く、姦聲無きなり。曾は猶ほ合のごときなり。皆なり。象皆鼓を撃つを待ち乃ち作を言ふ。周禮大師職に曰く、大

祭祀に、瞽を帥いて登り歌ふ。擊拊を合奏し、下管は樂器を播き鼓鞀を合奏す。文は鼓を謂ふなり。武は金を謂ふなり。相は即ち拊なり。亦た以て樂を節す。拊は韋を以て表と爲す。之を裝ふに縹を以てす。縹は一名相。因りて以て名づく焉。今齊人或は縹を謂ひて相と爲す。雅も亦た樂器の名なり。状は漆箛の如く中に椎有り。) 今夫れ新樂は、進むに俯し退くに俯し、姦聲以て濫し溺れて而して止まらず。及び優侏儒が子女を擾雜し、父子を知らず、樂終りて以て語る可からず、以て古を道ふ可からず。此れ新樂の發なり。(鄭注に、俯は猶ほ曲のごときなり。齊ならざるを言ふなり。濫は濫竊なり。溺れて而して止まず。聲の淫亂して以て之を治むる無し。擾は獼猴なり。舞ふ者の獼猴の戯るが如きを言ふなり。男女の尊卑を亂るを、擾或は優と爲す。) 今君の問う所の者は樂なり。好む所の者は音なり。夫れ樂なる者は音と相近くして而して同じならず。(鄭注に、言ふところは文侯は音を好みて、而して樂を知らざるなり。鏗鎗の類を皆音と爲し、律に應じて乃ち樂と爲す。) 文侯曰く、敢て問ふ何如と。(鄭注に、音樂と異なる意を知らんと欲す。) 子夏對へて曰く、夫れ古者は天地順にして而して四時當り、民に徳有りて而して五穀昌なり。疾疢作らずして而して妖祥無し。此れを之れ大當と謂ふ。然して後に聖人父子君臣を作爲して、以て紀綱と爲す。紀綱既に正しくして、天下大いに定まる。天下大いに定まりて、然して後に六律を正し、五聲を和し、詩頌を弦歌す。此れを之れ德音と謂ふ。德音之れを樂と謂ふ。(鄭注に當に樂其の所を失はざるを謂ふ。) 詩に云ふ、莫たる其の德音、其の徳克く明かなり。克く明かにして克く類す。克く長く克く君たり。此の大邦に王とし、克く順に克く俾ふ。文王に俾へて、其の徳悔ること靡し。既に帝社を受けて孫子に施すと。此れの謂ひなり。(鄭注に、此れ有徳の音にして、所謂樂なり。徳正しく應和なるを莫と曰ふ。四方に照臨するを明と曰ふ。勤み施して私無きを類と曰ふ。教誨して倦まざるを長と曰ふ。慶賞刑威を君と曰ふ。慈和徧く服するを順と曰ふ。俾は當に比と爲す當し。聲の誤りなり。善を擇びて之に従ふを比と曰ふ。施は延なり。言ふところは文王の徳、皆能く此の如し。故に天福を受く。後世に延ぶなり。) 今君の好む所の者は、其の溺音乎。(鄭注に、言ふところは文王の徳無ければ、則ち樂に非ざるを好む所なり。) 文侯曰く、敢て問ふ。溺音は何に従りて出づるや。(鄭注に、玩習之久しければ、由りて出づる所を知らざるなり。) 子夏對へて曰く、鄭の音は濫を好みて志を淫し、宋の音は女に燕んじて志を溺らし、齊の音は敖辟して志を喬くす。此の四者は皆色に淫して、而して徳に害あり。是を以て祭祀には用ゐ弗るなり。(鄭注に、言ふところは、四國の音は皆此の溺音に出づ。濫濫は竊む。姦聲なり。燕は安なり。春秋傳に曰く、懷と安とは實に名を敗る。趨數は讀みて促速と爲す。聲の誤りなり。煩は勞なり。祭祀には淫樂を用ひず。) 詩に云ふ肅雍和鳴は、先祖は是れ聽くと。夫れ肅は肅敬なり。雍は雍和なり。夫れ敬して以て和せば、何事か行れざらん。(鄭注に、言ふところは古樂は敬且つ和。故に事にして用ゐざるは無く、溺音は施す所無し。) 人君爲る者は、其の好惡する所を謹まん而已矣。君之を好めば則ち臣之を爲し、上之を行へば則ち民之に従ふ。詩に云ふ、民を誘むるは孔だ易しと。此れの謂ひなり。(鄭注に、誘は進なり。孔は甚なり。民は君の好惡する所に従ひ、之を善に進ましむれば難きこと無し。) 然して後に聖人鞀・鼓・控・揭・壎・箛を作爲す。此の六者は德音の音なり。(鄭注に、六者を本と爲し、

其の聲質を以てなり。控掲は祝敵を謂ふなり。壎箎は或は簫簴と爲す。) 然して後に鐘磬竽瑟以て之に和す。干戚旄狄以て之を舞ふ。此れ先王の廟を祭る所以なり。獻酬醕酢する所以なり。貴賤を官序し、各々其の宜しきを得る所以なり。後世に尊卑長幼の序有るを示す所以なり。(鄭注に、貴賤を官序すとは、尊卑・樂器、列數に差次有るを謂ふ。) 鐘聲は鏗なり。鏗以て號を立て、號以て横を立て、横以て武を立つ。君子鐘聲を聽けば、則ち武臣を思ふ。(鄭注に、號は號令にして象を警する所以なり。横は充なり。氣作充滿するを謂ふなり。) 石聲は磬なり。磬以て辨を立て、辨以て死を致す。君子磬聲を聽けば、則ち封疆に死するの臣を思ふ。(鄭注に、石聲は磬りの聲は、當に磬と爲すべし。字の誤なり。辨は節義を分明するを謂ふなり。) 絲聲は哀し。哀以て廉を立て、廉以て志を立つ。君子琴瑟の聲を聽けば、則ち義に志すの臣を思ふ。(鄭注に、廉・廉は隅なり。) 竹聲は濫なり。濫以て曾を立て、曾以て象を聚む。君子竽笙を簫管の聲を聽けば、則ち畜聚の臣を思ふ。(鄭玄注に、濫の意は猶ほ孽聚のごときなり。曾は猶ほ聚のごときなり。聚或は最と爲す。) 鼓聲の聲は謹なり。謹以て動を立て、動以て衆を進む。君子鼓聲の聲を聽けば、則ち將帥の臣を思ふ。(鄭注に、謹囂を聞かば則ち人意動作す。謹或は歡と爲す。動或は勳と爲す。) 君子の音を聽くは、其の鏗鏘を聽く而已に非ざるなり。彼も亦た之を合す所有るなり。(鄭注に、聲を以て己の志に合成す。)

賓牟賈孔子に侍坐す。孔子之れ與言ひて樂に及ぶ。曰く、夫れ武の之を備へ戒むること已に久しきは何ぞやと。對へて曰く、其の象を得ざるを病ふるなり。(鄭注に、武は周舞を謂ふなり。備戒して鼓を撃ち象を警む。病は猶ほ憂ひのごときなり。象心を得ざるを以て憂と爲す。其の難きを憂ふるなり。) 之を咏歎し、之を淫液するは、何ぞやと。對へて曰く、事に逮ばざるを恐るるなり。(鄭注に、咏歎淫液し、歌ひて之に遅るなり。逮は及なり。事は戎事なり。) 之を發揚蹈厲すること已だ蚤きは何ぞや。對へて曰く、時事に及べばなり。(鄭注に、時至れば、武事は當に施すべきなり。) 武は坐して右を致して左を憲つるは何ぞやと。對へて曰く、歩の坐に非ざるなり。(鄭注に、武の事は坐する無きを言ふなり。致すとは膝の地に至るを謂ふなり。憲の讀は軒と爲す。聲の誤りなり。) 聲淫して商に及ぶは何ぞや。對へて曰く、武の音に非ざるなり。(鄭注に、言ふところは、武の歌は其の軍を正すに在り。商を貧しくせざるなり。時人或は其の義を説くに商を貧と爲すなり。) 子曰く、若し武の音に非ずんば、則ち何の音ぞや。對へて曰く、有司其の傳を失へり也。若し有司其の傳を失へるに非ざれば、則ち武王の志荒めるなり矣。(鄭注に、有司樂を典る者なり。傳は猶ほ説のごときなり。荒は老耄なり。言ふところは樂を典る者が其の説を失ふなり。而も時人妄りに説くなり。書に曰く、王耄荒す。) 子曰く、唯々丘之諸を萇弘に聞けるも、亦た吾子の言の若く是れなり。(鄭注に、萇弘は周の大夫。)

賓牟賈起ち、席を免れて而して請うて曰く、夫れ武の之を備戒すること已に久しきは、則ち既に命を聞けり矣。敢て問ふ。之を遅くして遅くし、而して又久しくするは、何ぞや。(鄭注に、之を遅くし遅くするは、久しく綴に立つを謂ふ。) 子曰く、居れ。吾女に語らん。夫れ樂は成に象る者なり。干を總りて而して山のごとく立つるは、武王の事なり。發揚蹈厲するは、大公の志なり。武の亂に皆

坐するは、周召の治なり。(鄭注に、居は猶ほ安坐のごときなり。成は已に成るの事を謂ふなり。干を總べ盾を持つなり。山のごとく立つは猶ほ正しく立つのごときなり。武王の盾を持し正しく立ち、諸侯を待つに象るなり。發揚蹈厲は、威武の時を象る所以なり。武舞は戰鬪を象るなり。亂は行列を失ふを謂ふなり。行列を失ふときは則ち皆坐す。周公召公文を以て武を止むるに象るなり。) 且つ夫れ武は始めにして而して北出し、再成して而して商を滅し、三成して而して南し、四成して而して南國是れ疆ひし、五成して而して分れ、周公は左し、召公は右し、六成して綴に復りて、以て崇つ。(鄭注に、成は猶ほ奏のごときなり。武曲を奏する毎に、一終を一成と爲す。始奏は孟津に觀兵せし時に象るなり。再奏は殷に克つ時に象るなり。三奏は殷に克ち餘力有りて而して反るに象るなり。四奏は南方荊蠻の國、侵畔する者服するに象をなり。五奏は周公召公職を分ちて治むるに象るなり。六奏は兵還りて振振たるに象るなり。綴に復し位に反り止まるなり。崇は充なり。凡そ六奏し以て武樂に充つるなり。) 天子之を夾振して而して駟伐するは、威を中國に盛にするなり。(鄭注に、之を夾振する者は、王と大將と舞者を夾みて、鐸を振ひて以て節を爲すなり。駟は當に四と爲すべし。聲の誤りなり。武の舞は戰ひの象なり。奏でる毎に四伐するは、一撃一刺を一伐と爲す。牧誓に曰く、今日の事は、四伐五伐に過ぎず。)

分夾して而して進むは、蚤く濟るを事とするなり。(鄭注に、分は猶ほ部曲のごときなり。事は猶ほ爲のごときなり。濟は成なり。舞ふ者は各々部曲の列有り。又之を夾振する者は、兵を用ゐ早成に務むるに象るなり。) 久しく綴に立つは、以て諸侯の至るを待つなり。(鄭注に、武王紂を伐つに諸侯を待つに象るなり。) 且つ女獨り未だ牧野の語を聞かざる乎。(鄭注に、汝に語るに武樂を作るの意を以るんと欲す。) 武王殷に克ち商に反び未だ車を下るに及ばずして、而して黃帝の後を薊に封じ、帝堯の後を祝に封じ、帝舜の後を陳に封じ、車を下り而して夏后氏の後を杞に封じ、殷の後を宋に投じ、王子比干の墓を封じ、箕子の囚を釋し、之をして商容を行て、而して其の位を復せ使め、庶民には政を弛べ、庶士には祿を培にし、河を濟りて而して西し、馬は之を華山の陽に散じて、而して復た乗ら弗。牛は之を桃林の野に散じて、而して復た服せ弗。車甲衅りて而して之を府庫に藏して、而して復た用ゐ弗。倒に干戈を載せ之を包むに虎皮を以てし、將帥の士は、諸侯爲ら使む。之を名づけて建橐と曰ふ。然して後に天下武王之復た兵を用ゐざるを知れり也。(鄭注に、反は當に皮と爲すべし。字の誤なり。商に及び紂都に至るを謂ふなり。牧誓に曰く、商の郊牧野に至り、封は故土地無き者を謂ふなり。投擧は徒の辭なり。時に武王紂の子武庚を殷墟に封じ、徙す所の者は微子なり。後周公更に封じて之を大にす。土を積みて封と爲す。比干の墓を封じ賢を崇ぶなり。行は猶ほ視のごときなり。箕子商の禮樂の官を視て、賢者の處る所は皆其の居に反せ令むるなり。政を弛くし其の紂の時の苛政を去るなり。祿を培にし其の紂の時の薄き者を復するなり。散は猶ほ放のごときなり。桃林は華山の旁に在り。) 甲は鎧なり。衅は釁の字なり。干戈を包むに虎皮を以てし、能く武を以て兵を服するを明らかにするなり。建の讀を鍵と爲す。字の誤りなり。兵甲の衣を橐と曰ふ。鍵橐は兵甲を閉藏するを言ふなり。詩に曰く、載せて弓矢を囊む。春秋傳に曰く、囊を垂れて而して入る。周禮に曰く、之を囊

して其をして約せんと欲するなり。薊は或は續と爲す。祝は或は鑄と爲す。)軍を散じて而して郊射し、左に射るには貍首す。右に射るには騶虞す。而して貫革之射息なり。裨冕笏を搢はさみて、而して虎賁の士劔を説くなり。明堂に祀りて、而して民孝を知り、朝覲して然して後に諸侯臣たる所以を知り、藉を耕して然して後に諸侯敬する所以を知る。五者は天下の大教なり。(鄭玄注に、郊射は射宮を郊に爲すなり。左は東學なり。右は西學なり。貍首騶虞は、歌ひて節を爲す所以なり。貫革は甲革を射穿するなり。裨冕は裨衣に衣せて而して冕に冠するなり。裨衣衰衣の屬なり。搢は猶ほ挿のごときなり。賁は怒るなり。文王の廟を明堂制と爲す。藉を耕すは藉田なり。)三老五更を大學に食ひ、天子袒して而して性を割きて醬を執りて而して饋し、爵を執りて而して醕し、冕して而して干を總るは、諸侯の弟を教ふる所以なり。(鄭注に、三老五更は互ひに之を言ふ耳。皆老人三德五事を更知する者なり。冕して而して干を總ぶ。親は舞位に在るなり。周は大學を名づけて東膠と曰ふ。)此くの若くして則ち周道四達し、禮樂交通す。則ち夫の武の遅つこと久しくするも、亦た宜べならざる乎。亦た宜ならずや乎。(鄭注に、言ふところは武遅久するは、禮樂を重しと爲す。)

君子曰く、禮樂は斯須も身を去る可からず。樂を致して以て心を治むれば、則ち易直子諒の心、油然而生ず。易直子諒の心生ずれば、則ち樂しむ。樂しめば則ち安し。安ければ則ち久しきなり。久しければ則ち天なり。天なれば則ち神なり。天なれば則ち言はずして而して信なり。神なれば則ち怒らずして而して威あり。樂を致めて以て心を治むる者なり。(鄭注に、致は猶ほ深きなり。審なりのごとし。子讀んで子ならずの子の如し。油然は新生の好き貌なり。善心生ずれば則ち利欲より寡し、利欲より寡なければ、則ち樂なり矣。志明らかに行成り言はずして而して信ぜ見ること天の如きなり。怒らずして而して畏れ見ること神の如きなり。樂は中より出づ。故に心を治む。

禮を致めて以て躬を治むれば則ち莊敬なり。莊敬なれば則ち嚴威あり。(鄭注に、躬は身なり。禮は外自り作る。故に身を治む。

心中斯須も和せず樂まざれば、則ち鄙詐の心之に入る矣。(鄭注に、鄙詐之に入るとは、利欲生ずるを謂ふ。)外貌斯須も莊ならず敬ならざれば、則ち易慢の心之に入る矣。(鄭注に、易は輕易なり。)

故に樂なる者は内に動く者なり。禮なる者は外に動く者なり。樂は和を極め、禮は順を極む。内和して而して外順なれば、則ち民其の顔色を瞻て、而して與に争は弗るなり。其の容貌を望みて、而して民易慢を生ぜず焉。故に德輝き内に動きて、而して民承聽せざる莫し。理諸を外に發して、而して民承順せざる莫し。(鄭注に、德輝き顔色潤澤するなり。理容貌の進止するなり。)

故に曰く、禮樂の道を致めて、擧げて而して之を天下に錯けば、難きこと無し矣。

樂なる者は、内に動く者なり。禮なる者は外に動く者なり。故に禮は其の減を主とし、樂は其の盈を主とす。(鄭注に、禮は其の減を主とするは、人の倦む所なり。樂は其の盈を主とするは、人の歡ずる所なり。)禮は減じて而して進み、進むを以て文と爲す。樂は盈ちて而して反り、反るを以て文と爲す。(鄭注に、進むとは自ら勉強するを謂ふなり。反るとは自ら抑止するを謂ふなり。文は猶ほ美なり善なりのごときなり。)禮減じて而して進まざれば則ち銷し、樂盈ちて而して反らざれば則ち

放す。故に禮に報有りて、而して樂に反有り。(鄭注に、放は聲樂に淫し、止むる能はざるなり。報は讀んで褒と爲す。褒は猶ほ進のごときなり。)禮は其の報を得れば則ち楽しみ、樂は其の反るを得れば則ち安し。(鄭注に、得は其の義を曉り、其の吉凶の歸を知るを謂ふ。)禮の報は、樂の反、其の義は一なり。(鄭注に、俱に趨り中に立つは銷せず放らざるなり。)

夫れ樂は樂なり。人情の免る能はざる所なり。樂は必ず聲音に發し、動靜に形はる。人の道なり。聲音動靜、性術の變、此に盡く矣。(鄭注に、免は猶ほ自ら止むのごときなり。人道は人の爲す所なり。性術は此の性に出づるを言ふなり。此に盡くるは、過つ可からず。)故に人は楽しみ無き耐はず。楽しみ形はる無き耐はず。形はれて而して道を爲さざれば、亂る無き耐はず。(鄭注に、形聲は音の動靜なり。耐は古書に能の字なり。後世之を變ず。此に濁り存す焉。古は能を以て三台の字と爲す。)

先王其の亂るを恥づ。故に雅頌の聲を制して以て之を道びき、其の文をして楽しむに足りて而して流せざら使めて、其の文をして論ずるに足りて而して息まざら使め、其の曲直繁瘠、廉肉節奏をして、以て人の善心を感動するに足ら使むる而已矣。放心邪氣をして接するを得使めず焉。是れ先王樂を立つるの方なり。(鄭注に、流は猶ほ淫放のごときなり。文は篇辭なり。息は猶ほ銷のごときなり。曲は直歌の曲折なり。繁瘠廉肉は聲の鴻殺也。節奏闕作進止は應ずる所なり。方は道なり。)

是の故に、樂は宗廟の中に在りて、君臣上下同じく之を聽けば、則ち和敬せざること莫く、族長鄉里の中に在りて、君臣上下同じく之を聽けば、則ち和敬せざること莫く、族長鄉里の中に在りて、長幼同じく之を聽けば、則ち和順せざること莫く、閨門の内に在りて、父子兄弟同じく之を聽けば則ち和親せざること莫し。故に樂は審らかにして以て和を定め、物を比して以て節を飾り、節奏合して、以て文を成す。父子君臣を合和し萬民を附親する所以なり。是れ先王樂を立つるの方なり。(鄭注に、一を審びらかにし其の人聲を審びらかにするなり。物に比すとは金革土匏の屬を雜ふるを謂ふなり。以て文を成す。五聲八音克く諧ふ。相應和す。)

故に其の雅頌の聲を聽けば、志意廣きを得焉。其の干戚を執りて、其の俯仰詘伸を習へば、容貌莊を得焉。其の綴兆を行ね、其の節奏を要すれば、行列正を得焉。進退齊しきを得焉。故に樂は天地の命、中和の紀、人情の免る能はざる所なり。(鄭注に、綴は表なり。行列を表す所以なり。詩に云ふ、戈と綴とを荷ふは兆域なり。舞は進退の至る所なり。要は猶ほ曾のごときなり。命は教なり。紀は總要の名なり。)

夫れ樂は先王の喜を飾る所以なり。軍族鈇鉞は、先王の怒を飾る所以なり。故に先王の喜怒は、皆其の儕しきを得焉。(鄭注に、儕は猶ほ輩類のごとし。)喜べば則ち天下之に和し、怒れば則ち暴亂の者も之を畏る。先王の道は、禮樂を盛なりと謂ふ可し矣。(鄭注に、天子の天下に於ける、喜怒之を節するに禮を以てす。則ち兆民和從して而して之を畏敬す。禮樂は王者の常に興る所なれば、則ち盛なり矣。)

子贛師乙を見て而して問うて焉曰く、賜聞く、聲歌各々宜しき有りとなり。賜の如き者は、宜しく何を歌ふ宜きか。(鄭注に、子贛孔子の弟子、師は樂官なり。乙は名。聲歌各々宜しき有り。氣は性

に順ふなり。)師乙曰く、乙は賤工なり。何ぞ以て宜しき所を問ふに足らん。請ふ其の聞ける所を誦せん。而して吾子自ら執れ焉。(鄭注に、樂人を工と稱す。執は猶ほ處のごときなり。)愛とは宜しく商を歌ふべく、温良にして而して能く斷ずる者は、宜しく齊を歌ふ宜しと。夫れ歌は己れを直くして而して徳を陳ぶるなり。己を動かして而して天地應じ焉。四時和し焉。星辰理し焉。萬物育す焉。故に商は五帝の遺聲なり。寛にして而して靜。柔にして而して正なる者は、宜しく頌を歌ふべく、廣大にして而して靜、疏達にして而して信なる者は、宜しく大雅を歌ふべく、恭儉にして而して禮を好む者は、宜しく小雅を歌ふべく、正直にして而して靜、廉にして而して謙なる者は、宜しく風を歌ふべく、肆直にして而して慈愛なる(鄭注に、此の文は簡を換え其の次を失す。寛にして而して靜。宜しく上に在るべし。愛とは宜しく商を歌ふべきし。此の下を行を承け、讀んで肆直にして而して慈愛なる者宜しく商を歌ふべきを云ふ宜し。商は宋詩なり。愛或ひは哀と爲す。己を直くして而して徳を陳ぶ。各々其の徳に因りて宜しき所を歌ふ。育は生なり。)商の遺聲なり。商人之を識るせり。故に之を商と謂ふ。齊は三代の遺聲なり。齊人之を識せり。故に之を齊と謂ふ。(鄭注に、商の遺聲なりを云ふ。衍字なり。又誤る。上に云ふ所、故に商は五帝の遺聲なり。當に此の衍字の處に居く當きなり。)商の音に明なる者は、之に臨みて、故に之を齊と謂ふ。(鄭注に、商の遺聲なりと云ふ。衍字なり。又誤る。上に云ふ所故に商は五帝の遺聲なりと云ふ。衍字なり。又誤る。上に云ふ所、故に商は五帝の遺聲なり。當に此の衍字の處に居く當きなり。)商の音に明なる者は、之に臨みて而して屢々斷じ、齊の音に明なる者は、利を見て而して讓る。(鄭注に、屢は數なり。數は事を斷ずるに其の肆直なるを以てなり。利を見て而して讓る。其の温良にして能く斷ずるを以てなり。斷は猶ほ決のごときなり。)事に臨みて而して屢々斷ずるは勇なり。利を見て而して讓るは義なり。勇有り義有り、歌に非ずんば孰れか能く此を保たん。(鄭注に、保は猶ほ安なり知なりのごときなり。)故に歌ふ者は上るときは抗るが如く、下だるときは隊るが如く、曲まるときは折るが如く、止まるときは稟木の如く、偃るときは矩に中り、句ときは鉤に中り、纍纍乎として端なること貫珠の如し。(鄭注に、言ふところは歌聲の著にして、人心を動かすの審びかなること、此の事有るがごとし。)故に歌の言爲るや長く之を言ふなり。之を説ふ。故に之を言ふ。之を言ふて足らず、故に長く之を言ふ。長く之を言ふて足らず。故に之を嗟歎す。之を嗟歎して足らず。故に手の之を舞ひ、足の之を蹈むを知らざるなり。(鄭注に、長く之を言ふは、其の聲を引くなり。嗟歎するは之に和續するなり。手の之を舞ひ、足の之を蹈むを知らざるは、歡びの至りなり。子貢樂を問ふ。(鄭注に、上下同じく之を美とするなり。))

以上を以て、樂記第十九を終る。

樂は以て徳性を安んずとある名辭

史記の八書に、禮書第一、樂書第二、とあり、樂は禮に次いで、人間存立に資って不可缺視されるに至った史乘がある。先づ荀子の見解について考察して見ることにする。

荀子樂論篇第二十の冒頭に、夫れ樂なる者は樂なり。人情の必ず免がれざる所なり。故に人樂むこと無きこと能はず。樂めば、則ち必ず聲音に發し、動靜に形る。而して人の道は、聲音動靜にして、

性術の變是に盡く矣。故に人樂むこと無きこと能はず。樂めば則ち必ず聲音に發し而して形はるること無きこと能はず。形はれて而して道を爲さざれば、則ち亂るること無き能はず。先王其の亂るを惡むなり。故に雅頌の聲を制して、以て之を道き、其の聲をして以て樂むに足りて而して流せざら使め、其の文をして以て辨ずるに足りて而して認れざら使め、其の曲直繁省、廉肉節奏にして、以て人の善心を感動するに足ら使め、夫の邪汙の氣をして接することを得るに由し無から使む。是れ先王樂を立つるの法なり。而して墨子之を非とするは奈何。故に樂宗廟の中に在りて、君臣上下同じく之を聽けば、則ち和敬せざること莫く、閨門の内にて、父子兄弟同じく之を聽けば、則ち和親せざること莫く、郷里族長の中にて、長少同じく之を聽けば、則ち和順せざること莫し。故に樂なる者は一を審にして以て和を定むる者なり。物を比して以て節を飾る者なり。合奏して以て文を成す者なり。以て一道に率ふに足り、以て萬變を治むるに足る。是れ先王樂を立つるの術なり。而るに墨子之を非とするは奈何。故に其の雅頌の聲を聽けば、而して志意廣きを得焉。其の干戚を執りて、其の俯仰屈伸を習へば、而して容貌莊を得焉。其の綴兆を行き其の節奏を要すれば、而して行列正を得焉。進退齊を得焉。故に樂なる者は出でては征誅する所以なり。入りては揖讓する所以なり。征誅揖讓、其の義一なり。出でて以て征誅すれば、則ち聽從せざること莫く、入りて以て揖讓すれば仄則ち從服せざること莫し。故に樂なる者は、天下の大齊なり。中和の紀なり。人情の必ず免がれざる所なり。是れ先王樂を立つるの術なり。而るに墨子之を非とするは奈何。且つ樂なる者は先王の喜びを飾る所以なり。軍旅鉄鉞なる者は、先王の怒りを飾る所以なり。先王の喜怒皆其の齊を得焉。是の故に喜べば而して天下之を和し、怒れば而して暴亂之を畏る。先王の道、禮樂は正に其の盛なる者なり。而して墨子之を非とす。故に曰く、墨子の道に於けるや、猶ほ瞽の白黒に於けるがごときなり。猶ほ聲の清濁に於けるがごときなり。猶ほ楚に之かんと欲して而して北に之を求むるがごときなり。夫れ聲樂の人に入るや深く、其の人を化するや速かなり。故に先王謹みて之が文を爲す。樂中平なれば、則ち民和して而して流せず、樂齊莊なれば、則ち民齊しく而して亂れず。民和齊なれば、則ち兵勁く城固く、敵國敢て嬰せざるなり。是の如くなれば則ち百姓其の處に安んじざること莫し。其の郷を樂んで、以て其の上に至足せざること莫し矣。然る後に名聲是に於て白れ、光輝是に於て大に四海の民、得て以て師と爲すを願はざる莫し。是れ王者の始なり。樂姚冶にして以て險なれば、則ち民流慢鄙賤なり矣。流慢なれば則ち亂れ、鄙賤なれば則ち爭ふ。亂れ爭へば則ち兵弱く城犯され、敵國之を危くす。是の如くなれば則ち百姓其の處に安んぜず、其の郷を樂しまず、其の上に足らず矣。故に禮樂廢れて、而して邪音起る者は、危削侮辱の本なり。故に先王禮樂を貴んで、而して邪音を賤む。其の序官に在るや、曰く、憲命を脩め、誅賞を審かにし、淫聲を禁じ、時を以て順脩して、夷俗邪音をして、敢て雅を亂さざら使むるは、太師の事なり。墨子曰く、樂なる者は聖王の非とする所なり。而して儒者之を爲すは過なりと。君子以て然らずと爲す。樂なる者は聖人の樂しむ所なり。

以上論説からも明らかな如く、樂と對比的關係に在る現行の墨子には、明鬼の上中とも缺如しており、明鬼下のみ現存している状況にある。非樂も亦た上篇のみ現存し、非樂の中下とも闕如している。

幸い明鬼下と非樂上の二篇のみ現存するに至る。この二篇に依り、説の概要は知ることが出来る。

樂論の結論として、次の一文を此處に紹介して結論としておく。即ち其の能く安燕して而して亂れざるを知るなり。貴賤明かに、隆殺辨じ、和樂して而して流せず。弟長にして而して遺すこと無く、安燕して而して亂れざるなり。云云とある一文を参照されたい。樂論の由來と其の歴史的經過の概要に關しては、永い歴史的經過が明示してあるが如く、洪大な東洋の大陸に傳統ある文化と其の形式とは民族の發展に寄與し、卓越した文化の内容がそれを示している。世界人類に比類を見ない展開は今にして瞠目に値する文化であること世界人類の齊しく認めるところである。

(2006 年 9 月 25 日受理)